

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 3 日現在

機関番号：33910

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25580165

研究課題名(和文) ジャクソン・ポロックと連邦芸術計画

研究課題名(英文) Jackson Pollock and Federal Art Project

研究代表者

河内 信幸 (KAWAUCHI, Nobuyuki)

中部大学・国際関係学部・教授

研究者番号：40161278

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)： ジャクソン・ポロック(Jackson Pollock)は、「アクション・ペインティング」の旗手として知られ、アメリカ抽象表現主義を代表する芸術家といわれている。しかし、ポロックはインディアン文化やメキシコ壁画運動にも共鳴し、当初は「アクション・ペインティング」とは程遠い作風の芸術家であった。本研究では、ポロックが関わった雇用促進局(Works Progress Administration: WPA)の連邦芸術計画(Federal Art Project: FAP)の意義を明らかにし、ポロックが「抽象」と「具象」を動的に融合させ、独自のアメリカ・モダニズムを追い求めたことを検証した。

研究成果の概要(英文)： Jackson Pollock is well known as the standard-bearer of the action painting in America. Pollock sympathized with the American Indian culture and the Mexican mural movement in your youth, but his art style was very different from the action painting. This research verified the historical significance of Federal Art Project and made clear that Pollock tried to fuse the "abstract" and the "concrete" together. So according my research, Pollock tried to pursue the original American modernism in the abstract expressionism.

研究分野：アメリカ現代史、アメリカ社会史

キーワード：ニューディール 連邦芸術計画 グッゲンハイム美術館 パブリック・アート アクション・ペインティング
アメリカ抽象表現主義 モダニズム

1. 研究開始当初の背景

(1)1930年代の大恐慌はアメリカ美術にも大きな転機となり、ヨーロッパ偏重の芸術的伝統とヴィクトリアニズムを根底から揺るがすとともに、自己表現の機会を失った美術家たちは、生活苦から様々な社会問題を意識せざるを得なくなった。

ニューディール政策は公共事業の一環として芸術プログラムを発足させることになり、美術家たちに作品の制作を委嘱し、彼らの生活のある程度保証する救済策をとることができた。このような芸術プログラムは、アメリカ独自のモダニズムが生まれる契機ともなり、抽象表現主義 (Abstract Expressionism) の隆盛へとつながった。

(2)国家による芸術文化政策は、1930年代の大恐慌に対処するニューディール政策のもとで、財務省や事業促進局 (Works Progress Administration: WPA) の芸術プログラムを嚆矢とする。それは、公共事業芸術プロジェクト (Public Works of Art Project: PWAP) の短期プログラムから始まり、財務省絵画・彫刻部 (Treasury Department Section of Painting and Sculpture) の壁画プロジェクト、同じ財務省管轄の救済芸術プロジェクト (Treasury Relief Art Project)、そして WPA による「連邦芸術第 1 号」 (Federal Number One) の連邦芸術プロジェクト (Federal Art Project: FAP) などのプログラムが、未曾有の社会危機のなかで先駆的に展開された。

2. 研究の目的

ジャクソン・ポロック (Jackson Pollock) は、「アクション・ペインティング」の旗手として知られ、アメリカ抽象表現主義を代表する芸術家といわれている。しかしポロックは、1930年代にニューディールの芸術プログラム、特に雇用促進局 (WPA) の連邦芸術計画 (FAP) に参加したのであり、インディアンの文化やメキシコ壁画運動からも影響を受け、当初は「アクション・ペインティング」とは程遠い作風の芸術家であった。

そのため、ポロックの作風の変遷は、大恐慌という社会危機のなかで連邦芸術計画 (FAP) に参加したことを分析しなければ理解できない。本研究では、ポロックと FAP との関わりを分析し、初期のポロックが独自のアメリカ・モダニズムを追い求めたことを明らかにする。そして、このようなポロックの作風がアメリカ抽象表現主義を隆盛させる契機となり、ひいては現代アメリカのパブリック・アート政策へとつながった背景を探る。

3. 研究の方法

(1) 文献・資料の分析

* Marika Herskovic, *American Abstract Expressionism of the 1950s: An Illustrated Survey* (New York School Press, 2003).

* ———, *New York School Abstract*

Expressionists Artists Choice by Artists (New York School Press, 2000)

* Martin R. Kalfatovic, *The New Deal Fine Arts Projects* (Metuchen, N.J.: Scarecrow Press, 1994)

* Robert Atkins, *Art Spoke: A Guide to Modern Idea, Movements, and Buzzwords, 1848 - 1944* (New York: Abbeville Press, 1993) など

* ポロック資料・展示会図録の分析...グッゲンハイム美術館、ニューヨーク近代美術館 (MoMA)、メトロポリタン美術館、ペギー・グッゲンハイム・コレクション (イタリア) などから入手

(2) 現地調査による資料収集

連邦芸術計画 (FAP) とポロックに関する原資料...2015年2月~3月: ニューヨーク・ワシントン調査 (国立公文書館・議会図書館)

* WPA 関係: 国立公文書館・議会図書館

・ Archives of the Works Projects Administration and Predecessors

・ WPA New Deal Art During the Great Depression

・ Federal Art Project Photographic Division Collection (Smithsonian Archives of American Art)

・ Posters from the WPA (Library of Congress)

・ Database of WPA Murals

・ Text and Graphics from 1937 WPA Brochure: "Our Job with the WPA"

・ Text and Graphics from 1939 WPA Brochure: "Questions and Answers on the WPA"

* ポロック・グッゲンハイム関係

・ グッゲンハイム美術館資料、今世紀芸術画廊資料

ペギー・グッゲンハイム資料...2015年8月~9月: イタリア (ヴェネツィア) 調査

* Peggy Guggenheim Collection

* Biennale Library

* Historical Archives

4. 研究成果

(1) 恐慌の蔓延とポロックの精神的葛藤

1935年8月から、雇用促進局 (WPA) により連邦芸術計画 (FAP) が開始された。WPA の文化部門は、演劇、絵画、文学、音楽、歴史調査の5つに分かれていたが、絵画はこの中の第1プロジェクトであり、美術家は試験によって雇用され、定期的に作品を提出することを条件に給料が支払われた。美術家たちは、WPA からキャンバス、絵具、絵筆などの画材を与えられ、民衆の生活を描いたり、公共施設に壁画を制作したりする仕事に取り組んだ。

ポロックは、1935年8月に兄のサンフォードとともに WPA の FAP に採用され、登録した壁画部門の仕事に従事した。さらに翌

1936年になると、ポロックはFAPの画架部門にも登録し、FAPの仕事はWPAが終焉する1943年まで続いた。

ところが、絵画に対するポロック姿勢は、無意識レベルの強烈な「原感情」の表出を処理できず、意識の進める写実の作業に強く抵抗するようになった。しかも、そこには師と仰ぐアメリカン・シーン派(地方主義)の画家トーマス・H・ベントン(Thomas H. Benton)との離別の葛藤が絡んでおり、ポロックは、無意識から生まれる感性を芸術のモチーフにすべきだと強く思った。しかし、それは既成のコンセプトに対する大きな反逆であり、ポロックは孤独な闘いを強いられて苦悩を深めた。その結果、ポロックは次第に飲酒に溺れるようになり、アルコール依存症の治療を必要とするに至った。入院したポロックは、ユング派の精神科医師ジョセフ・L・ヘンダーソン(Joseph L. Henderson)博士から精神分析の治療を受けた。ヘンダーソン医師は、ポロックに自由連想法によるデッサンの作成(オートマティズム)を求めた。

精神分析の治療を受けたポロックは、ロシアから亡命してきた前衛芸術家のジョン・D・グレアム(John D. Graham)と知り合いになると、次第に無意識の内的イメージを研ぎ澄ますようになった。その結果、ポロックは深い混迷を抜け出し、無意識の内的イメージを抽象化して描く道を切り開いた。1938年から1941年の作品である『ナイフを持った裸の男』、『鳥』、『誕生』などは、このような「原感情」の内的イメージがモチーフになったものである。

(2) ポーリング・ドリッピングと「アクション・ペインティング」

1943年1月にWPAのプロジェクトが終了したため、ポロックは、「非対象絵画美術館」(後のグッゲンハイム美術館)の管理人として働き、ペギー・グッゲンハイム(Peggy Guggenheim)と運命的な出会いを果たすことになった。ペギーは、ヨーロッパの抽象画の流れに追随していない、「原感情」を表出させたポロック独自の作風に強い衝撃を受けたと言われ、「今世紀芸術画廊」専属の新人画家とすることを決めた。

1943年11月、ポロックにとって初めての個展が「今世紀芸術画廊」で開かれ、『秘密の守護者たち』、『男と女』、『月女』、『雌狼』など15点の作品が展示された。これらはイメージを隠して抽象化するスタイルの作品であり、「形象」と「抽象」という二律背反の要素が反発しながら動的に融合する表現をなしている。それはアメリカに初めて登場した独自の前衛絵画であったが、最初はほとんど理解されることなく、後に最大の賛同者となるクレメント・グリーンバーグ(Clement Greenberg)でさえ、単に呆気にとられるだけに終わったと伝えられる。そのため、ペギーの賛同にもかかわらず、この最初の個展では

ドロウイングが1枚売れただけであり、ポロックは虚脱感と焦燥感から飲酒に溺れていった。

ポロックは、すでに1943年に『ポーリングによる構成』を制作していたが、床に寝かせたカンヴァス全体を均質に覆う、オール・オーバーのポーリング・ドリッピングを1946年後半から始めた。こうして、ポロックは自己の感情の根源にある無意識の動きを直接的に表現する方向に向かうが、初期のポーリング・ドリッピング作品は、イメージを隠蔽する手法が残っており、イメージが画面全体に滴り落とされた絵具の下に潜んでいた。ポロックは、子供の頃からインディアンの文化や芸術に関心があり、ナヴァホ族のアーティストが床で砂絵を制作する光景に惹かれ、床に寝かせたカンヴァスに筆や棒などを使って絵具を滴らすポーリングやドリッピングへのヒントを得たのであった。

そして、ポロックは、1947年に『五尋の深み』や『大聖堂』を制作すると、1948年頃から完全にイメージを捨て去り、無意識の領域にある「原感情」そのものを絵画に表出させようとした。ポロックは、無意識の内的緊張感を頼りに、絵具や塗料を含んだ筆・棒を振り、四方からペンキ缶を滴らす行為を次々と繰り返すようになった。このようなポーリングやドリッピングを駆使することにより、ポロックは精神のダイナミズムをエネルギーに躍動させ、「アクション・ペインティング」の代表作を瞬く間に生み出した。ポロックにとっては、描く行為自体のもたらず高揚感と精神の集中こそがリアルなものであり、描く行為の空間にある自分が「自然」なのであった。カンヴァスは行為の場(フィールド)であり、疎外された自らを実現する場であった。

(3) ポロックの高揚と行き詰まり

特に1949年になると、ポロックの名前が広く知れ渡ることとなった。『ライフ』誌は、すでに1948年10月のモダンアート論壇でポロックを取り上げていたが、1949年8月には、「ジャクソン・ポロックーアメリカで活躍する最大の画家か」と題する特集を組んだ。

ポロックは1950年に50作以上もの作品を制作し、創作活動のピークを迎えた。しかも、ニューヨーク近代美術館が『ナンバー1A』を買い上げ、ポロックはイタリアなどの展覧会にも多くの作品を出品した。そして、1950年11月には「パーソンズ画廊」で4回目の個展が開かれ、その年に制作された大作32点が展示されると、前年8月の『ライフ』誌の特集も影響し、多くの観客が訪れて大盛況となった。

しかし、ポロック自身は、絵画の源泉を無意識の緊張感に求めれば求めるほど、その精神的な高揚が去った時とのギャップは大きく、言い知れぬジレンマと苦悩に苛まれつつあった。その結果、ポロックのなかで強がりと

苦悩が渦巻くようになり、無意識の純粋性を内面的に求める一方で、自らの作品に通常の数倍の高値をつけるような行動をとった。またポロックは、1950年5月に他の17名の画家グループ「イラクシブルズ」(怒れる者たち)とともに、メトロポリタン美術館へ書簡を送り、審査委員が前衛芸術に敵意を抱いていると抗議し、企画中の「アメリカ美術今日展」への不参加を表明した。

しかし、このような社会的な行動や主張もポロックの精神的葛藤を沈静化させるものにはならず、1950年10月に2年間の禁酒を突然破ると、一挙に過度の飲酒と荒れた生活に舞い戻っていった。無意識の「原感情」を純化させる「アクション・ペインティング」は世俗とのギャップが余りにも大きく、ポロックの生活は次第に荒れ果て、深夜に知人宅の前で「俺には居場所がない」と叫ぶこともあったといわれる。

(4)ブラック・ペインティングへの逃避

ポロックは、1951年11月に「パーソンズ画廊」で5回目の個展を開き、後に「ブラック・ペインティング」と呼ばれる、黒一色のオール・オーバー作品を出品した。当時のポロックは、イメージ以前の無意識の段階に照準を当てるとともに、イメージを映し出す色彩を捨てて黒一色に作品を収斂させ、ポーリングやドリッピングの画面に強力な線を重層化して描いた。このような「ブラック・ペインティング」や線の重層化は、ポロックの苦悩を表しており、それまでの「アクション・ペインティング」からの脱却を図ろうとするものであった。

しかし、過度の飲酒がポロックの精神と肉体を蝕み、1951年9月にアルコール中毒の治療が再開されると、1955年の夏からはかつてのような精神分析も受け始めた。そしてポロックは、1953年末頃からほとんど創作活動が不可能となり、1954年頃からは全面的に創作を止めてしまった。

(5)ポロックの芸術性と影響力

連邦芸術計画(FAP)は後期ニューディール政策のなかで実施され、さまざまなポスター、壁画、絵画、彫刻が作成された。FAPの最盛期には5000人以上の芸術家が雇用されたといわれ、彼らは、未曾有の大恐慌下で社会意識を高め、公共施設やコミュニティとの関わりを深めた。

当時のポロックは芸術に社会的メッセージを求め、芸術のモチーフを「形象」の世界に置いていたと思われる。ところが、ファシズムの脅威と戦争への不安がポロックの作風を大きく変化させていったのであり、無意識の「原感情」をモチーフとする、「アクション・ペインティング」から「ブラック・ペインティング」へと変化していった。

しかし、ポロック自身は世俗とのギャップがあまりにも大きく、精神的高揚が去った時

のジレンマと苦悩に苛まれ続けた。そのため、ポロックはアルコール依存へと追い込まれ、より内省的な精神世界へと分け入ることになった。その結果、ポロックは無意識の内的イメージを抽象化して創作活動を行い、戦後のアメリカ抽象表現主義を代表する芸術家になったのである。

1930年代のアメリカでは、連邦芸術計画(FAP)の理念が象徴するように、社会派の具象美術や地方主義の絵画が主流であり、戦後の抽象表現主義を代表するポロックは、これとは異質の存在と考えられてきた。そのため従来は、1930年代の芸術トレンドと戦後の抽象表現主義との間に大きな「断絶性」があると考えられてきた。

しかし、本研究によって明らかになった、ポロックに関する次のような着想からも、その背景に十分な「連続性」があると考えられる。第一は、ポロックが、メキシコ壁画運動のディエゴ・リベラ(Diego Rivera)、ホセ・オロスコ(José Orozco)、ダビッド・シケイロス(David Siqueiros)に惹かれ、インディアンの生活や文化にも関心を抱いていたことである。若い頃のポロックは、アメリカ西部への旅行を重ね、地方色のスケッチを描いていた。第二は、ポロックの参加したFAPが、アメリカ的な情景をモチーフにした芸術文化の振興を、公共事業の一環として目指していたことである。

ポロックはヨーロッパのアヴァンギャルドを乗り越え、アメリカ抽象表現主義への道を切り開いたのであり、それは、連邦施設管理庁(General Service Administration)の「連邦政府の新築建設における美術プログラム」(Fine Arts in New Federal Buildings Program)、全米芸術基金(National Endowment for the Arts)の「公共空間アート・プログラム」などへと結びつき、現代アメリカのパブリック・アート政策へとつながったのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

Nobuyuki Kawauchi, The Origins of American Public Arts Policy: Path toward Establishing the National Endowment for the Arts, 貿易風(*Chubu International Review*), 査読有, Vol. 10, 2015, 35-46

https://opac.bliss.chubu.ac.jp/webopac/catdbi.do?pkey=XC15000051&initFlg=_RESULT_SET_NOTBIB

河内 信幸, アメリカとホロコースト、「国際」という夢をつむぐ: 中部大学開学50周年・国際関係学部創設30周年記念論集, 査読無, 2014年, 103-122

河内 信幸, 中島釀「アメリカ国家像の再構成」ニューディール・リベラル派とロ

バート・ワグナーの国家構想¹⁾、アメリカ
経済史研究、査読無、第 13 号、2014 年、
53 - 57

Nobuyuki Kawauchi, Ben Shahn's
"Sorrowful Metaphor": The Suffering
from the Diaspora and the Holocaust,
貿易風(*Chubu International Review*),
査読有, Vol. 9, 2014, 77-26

[https://opac.bliss.chubu.ac.jp/webopac/
catdbldo?pkey=XC14000044&initFlg=
_RESULT_SET_NOTBIB](https://opac.bliss.chubu.ac.jp/webopac/catdbldo?pkey=XC14000044&initFlg=_RESULT_SET_NOTBIB)

Nobuyuki Kawauchi, Ben Shahn's
Identity and Dilemma with War, 貿易
風(*Chubu International Review*), 査読
有, Vol. 8, 2013, 7-19

[https://opac.bliss.chubu.ac.jp/webopac/
catdbldo?pkey=XC13000044&initFlg=
_RESULT_SET_NOTBIB](https://opac.bliss.chubu.ac.jp/webopac/catdbldo?pkey=XC13000044&initFlg=_RESULT_SET_NOTBIB)

〔学会発表〕(計 5 件)

河内 信幸、福島 崇宏、ライフサイク
ル・アセスメントと原油価格の変動、中
部大学産業経済研究所、2016 年 3 月 11
日、中部大学(愛知県・春日井市)

河内 信幸、アメリカ景気循環のジレン
マ その背景と要因、アメリカ経済史学
会 12 月例会、2015 年 12 月 5 日、明治
大学(東京都・杉並区)

河内 信幸、中島釀「アメリカ国家像の
再構成 ニューディール・リベラル派と
ロバート・ワグナーの国家構想¹⁾、アメリ
カ経済史学会 12 月例会、2014 年 12 月 6
日、駒澤大学(東京都・世田谷区)

河内 信幸、アメリカとホロコースト
“ユダヤ・コモンウェルス”の夢、第 56
回北陸史学会、2014 年 11 月 11 日、金沢
大学サテライトプラザ(石川県・金沢市)

河内 信幸、戦後アメリカにおける景気
循環と経済政策の変遷、アメリカ経済史
学会第 56 回全国大会、2013 年 10 月 5 日、
龍谷大学(京都府・伏見区)

〔図書〕(計 3 件)

河内 信幸 他、彩流社、北米の小さな
図書館 3、2014 年、80 - 89

河内 信幸 他、大学教育出版、アメリ
カを知るための 18 章 超大国を読み解
く、2013 年、87 - 96

河内 信幸 他、大学教育出版、英語で
知るアメリカ 8 つのテーマで超大国の
実情に迫る、2013 年、113 - 140

〔その他〕

河内 信幸、ケネディとアメリカ政治、
かすがい熟年大学、招待講演、2014 年 7
月 23 日、文化フォーラム春日井(春日井
市)

河内 信幸、中野耕太郎著「戦争のるつ
ぼ 第一次世界大戦とアメリカニズム¹⁾、
アメリカ学会会報、第 185 号、2014 年、

8 - 8

ホームページ等

[http://www.chubu.ac.jp/about/faculty/pr
ofile/7cc8fb66ad971c3cb2ca6e078fcbfb28d
c25e829.html](http://www.chubu.ac.jp/about/faculty/profile/7cc8fb66ad971c3cb2ca6e078fcbfb28dc25e829.html)

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

河内 信幸 (KAWAUCHI, Nobuyuki)

中部大学・国際関係学部・教授

研究者番号：40161278

(2) 研究協力者

福島 崇宏 (FUKUSHIMA, Takahiro)